



神戸市立博物館のサビエル像(重要文化財)

一五〇六年のきょう  
四月七日、日本にキリ  
スト教を伝えたフラン  
シスコ・サビエルはス  
ペインに生まれた。

十九歳でパリ大学に  
留学、そこでイグナチ  
オ・ロヨラに出会い、  
三十一歳の時、ロヨラ  
ら七人の仲間とイエズ

ス会を創立した。三十  
五歳で布教のためイン  
ドに向かい、日本に着  
いたのは一五四九年、  
四十三歳の時である。  
私利私欲を捨て、神  
の国の証しをするため  
に生涯を捧げる。日本  
からさらに中国での布

## 涙で顔を洗う

東日本大震災①



サビエル生誕五百年

巡礼の道

243

藤屋 侃士  
(下松市幸ヶ丘)

教を目指し、中国大陸を目前に上川(サンチヤン)島で病死、享年四十六歳であった。サビエル生誕五百年の二〇〇六年、サビエルとロヨラの生誕地、スペインをはじめ、フランス、ポルトガルを旅することにした。六十五歳で勤めをやめた翌年のことである。

それを知った新周南新聞社の橋詰主幹(昨年八十歳で引退)から「巡礼記を書いてみませんか」とお誘いを受け、帰国直後の四月十三日に第一話を書いた。

早いものであれから五年が過ぎる。視点の定まらぬ薄っぺらの信仰心。五年の節目を機に「信仰について」「生きること」「老いをどう迎えるか」などを少しでも深めたいと、改めてサビエルの伝記を読み始めた。

その矢先に起こった今回の東日本大震災、何か今まで平穏に生きて来たことをすべて打ちこわされたような気がする。

映画ですらこれほどのすさまじい惨状を演出することはできないだろう。津波によってマッチ箱のように家が、車が流され、生活のすべてが奪い去られる。時間が経つにつれ、また知れば知るほど被害の余りの大きさに言葉を失う。

死者・行方不明者は二万八千人を超え、一カ月が過ぎようというのにまだ遺体すら発見されない人が大勢いる。

つい一時間前まで平穏に生活していた人たちが一瞬のうちに津波にのみ込まれ、命を失った。冷たい海水、汚泥、がれきの中で、何となく残酷な死だろう。神は本当におられるのだろうか。サビエルがこの惨状を見たら何と言われるだろうか。

大震災が原因でもあるまいが、時を同じくして体調を崩す。エコ1、レントゲン、造影剤によるCT、原因がわからない。

そのせいで気の持ち方が弱くなったのか、



この太平な世の中で孤児になった子どもは100人に達する

震災のニュースを新聞やテレビで見ると涙を流す。気が重くなる、見るのをやめようと思うがどうしてもくぎづけになる。悪いことは重なり、原発による放射能汚染は広がる一方だ。

もはや日本だけの問題ではない。大自然の脅威、人間の非力さ。ふと流れる涙が悲しみや同情だけでないのに気づく。生き残った人たちの前向きさ、秩序を守り手をとり合う

連帯の素晴らしさ、生き抜くたくましさへの涙だ。

そうだ、この涙で顔を洗い、被災者の皆さんがあれだけ頑張っているのだから自分ができることをどんな小さなことでも始めよう。

◇ ◇

「わたしたちのすることは、大海のたった一滴の水にすぎないかもしれない。でもその一滴の水が集まって大海となるのです」  
(マザー・テレサ)